



Title	進藤省次郎教授について
Author(s)	大沼, 義彦
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 104, 329-337
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32504
Type	departmental bulletin paper
File Information	P329-337.pdf



進藤省次郎教授について

大 沼 義 彦*

A Profile of Professor Shojiro SHINDO

Yoshihiko OHNUMA

進藤省次郎教授は、東京教育大学体育学部を卒業後、東京都立高校の体育教諭として約17年間教育現場に立たれ、その後1984（昭和59）年に北海道大学教育学部に赴任された。以来、約24年間の永きにわたり本学の教育・研究の発展にご尽力され、この間、体育実技教育や学部教育、大学院教育の場において、学生・院生の指導にあたられてきた。その人間味にあふれ、包容力のある先生の姿は、多くの学生・院生を魅了し続けたといつてよいであろう。

全学教育課程では、旧教養部における「体育実技」、全学教育となつてからは「体育学Ⅰ・Ⅱ」、「体育学A」を担当され、平成18年度より開講された「体育学B」においては、体育やスポーツが抱える今日的課題に対し、より身近な事象から接近され、その実践的展望を学生に説かれてきた。

学部専門教育においては、「体育方法論」を中心に、「保健体育科教育法」「基礎演習」「専門演習」を担当された。とりわけ、教育現場における指導方法、内容、評価等については、日本における体育科教育実践の蓄積を深く掘り下げながら、次代の体育科教育のあり方を学生と共に探究されてきた。また、体育の実践的力量と指導力量の形成をめざした水泳や器械運動や各種球技運動などの授業においては、自ら範を示しながら授業を展開された。こうした授業を通して、学生たちは体育・スポーツにおける実践的・学問的関心を膨らませていったといえる。

大学院教育においては、「スポーツ教育論」、「健康スポーツ教育論調査実験」をはじめ、多くの院生指導にあたられた。各種スポーツの技術指導を中心としながらも、それ以上にスポーツ指導における教授過程、方法論の構築に努められた。

「“誰にでもわかり、誰もができる”ような指導内容と順序と方法を明らかにすること」。

これが、体育方法研究グループ、前井芹武二郎先生、進藤先生が掲げてきた課題であった。そこでは、社会人・外国人留学生を含め多くの学生・院生が学び、議論を交わし、時流に流されない体育の本質的理解の探求がなされてきたといつてよい。

進藤先生の専門分野は、体育方法研究、体育科教育研究であり、一貫して体育教育に関わる諸課題を具体的実践場面に即して明らかにされてきた。言い換えれば、スポーツ技術指導の面から、体育現場とスポーツ科学研究との距離を詰めていく作業、教育現場へ還元可能な授業内容・方法を具体的に提示していく作業に尽力されてきたものといえる。その研究内容は、大きく次の三つの領域から構成される。

* 北海道大学大学院教育学研究院准教授（体育計画〔体育社会学〕研究グループ）

(1) 体育の本質論的理解

進藤先生は、体育の本質論的理解において、スポーツ「ルール」の何を認識対象として位置づけることができるかという問題意識から出発し、ルールの歴史性をふまえた運動文化としての価値を導出していった。そして丹下保夫（体育原理）をはじめ、学校体育研究同志会の理論的・実践的蓄積に学びながら、「スポーツ分野における主体形成」をめざした「運動文化をトータルに」「その文化的総合性を教える」教育として体育教育を位置づけた。その特長は、第一に、授業、すなわち体育の教授・学習過程を運動（スポーツ文化）の技術的過程と組織的過程とに区別し、その統一的過程としてとらえること（芝田進午）、第二に、前者の技術的過程を①客観的に把握可能な技術と、その技術の遂行可能性としての②個人的な技能とに峻別し、「技術」における「わかること」の可能性を追求していくこと、第三に、これらの技術的過程を念頭におきながら、実践場面での組織的過程、具体的にはグループ学習を中心に位置づけた体育における学習の組織化をその射程に据えていった点にある。

さて、こうした進藤先生の研究は、戦後の教育方法学の文脈とも重なっている。それは大きくいえば、戦前までの経験主義、鍛錬主義をどう乗り越えていくかという課題と向き合うことであった。

1958年以降のいわゆる系統学習の時期、およびそれに続くいわゆる「現代化」の時期を通じ、日本の民間教育研究運動は、様々な分野で豊富な実践研究を産み出していった。進藤先生が提起した点も、これらの成果や諸論点によるものであった。それは、①教育内容と教材を明確に区別すること、②技術指導における要素分解的指導ではなしに、「単位」としての指導内容と教材を構築すること、といえる。同時に、それが「すべての子どもに」教授できるものとして構想されている点も重要であった。

というのも、1970年代後半から教育内容の「現代化」の後退は、教育内容研究・教材研究自体の進展に少なからず影響を及ぼしたためである。また1977年の「ゆとりと充実」に続く1990年代の「新学力観」の登場は、教育内容研究をより希薄化させ、かわって「関心」「意欲」「態度」を前面に押し出していった。体育科教育の中では、いわゆる「めあて学習」が展開され、戦後追求されてきた「わかること」と「できること」の統一的把握から、「わかること」の矮小化と「できること」の自得化への移行（たとえば「法則化運動」）が鮮明となっていった。

これに対し進藤先生は、運動が苦手な児童・生徒を含む「すべての子ども」に対する教授方法・内容の構築という観点から再考を迫っている。ここでは、「わかること」を理論的・科学的認識と形象的認識とに分節化し、その中核に運動文化における価値が置かれた。また「できること」については、運動技術理解＝「わかること」を設定し、その両者を統一的に把握するという視点を一貫して追求められた。身体を行使し、運動を行うという体育科教育固有の方法的観点、言い換えれば、体育だから積極的にこれを位置づけ展開することができるという観点を準備・設定したことは、体育科教育の本質論的理解に対する深い洞察に基づくものであったと理解される。

(2) 運動技術の理解

前述したように、「できる」ことをいかに認識するか、また運動をどう把握するかは、体

育やスポーツにおいて重要な課題であった。これは、スポーツ科学の分野において二つの方向から追求されてきたといえる。一つは、K. マイネルの運動学、もう一つがより科学的客観的に機能合理的に運動を記述するバイオメカニクスである。前者においては、客観的運動に運動主体を組み込んだ運動記述を志向し、後者は、物理的現象として身体運動を捕捉し、その科学的方法の洗練化を志向していったと考えることができる。両者の間には、「運動主体」をどう把握するかという点で差異がみられる。

進藤先生のアプローチは、前者の立場から運動分析を行い、そしてマイネルの運動技術の構造的把握を援用しながら、それぞれの運動文化の本質に即して教育内容を分節化、教材化していった点に大きな特徴がある。それは、学習者による豊富な内省報告と不可分であった。これらをもとにした教育内容の吟味と順序構造の解明により、具体的な授業プランが提示されることになる。

（３）学習内容と方法の吟味、授業プランの提示、学習の組織化

以上は、進藤先生の研究の前提をなす部分であり、繰り返し論述されてきた基本的枠組みであった。しかしより具体的には、教育現場における良質な教育内容を提供し続けることが体育方法研究グループの主題であり、そのため指導プランの提示・検証作業（仮説実験授業等）がより根本的課題となる。

進藤先生の指導プランは、大きく三つの領域にまとめることができる。一つは、マット・跳び箱・鉄棒運動等の器械体操に関わる研究、二つ目はドル平泳法を出発点とし近代泳法へと展開させる水泳指導、三つ目には、卓球、バレーボール、ソフトボール等の球技運動に関わる研究である。なかでも器械体操研究においては、跳び箱運動の発生形態、運動構造を考察し、金子明友の指導理論を批判的に摂取しながら、オリジナルな技術指導体系を構築している。「腕立て横跳び越し」→「側転跳び」→「側転跳び 1/4 前ひねり」→「前転跳び」という技の発展的系統性を仮説的に提示・実施し、その妥当性を検討した同研究は、今日でも高い評価を得ている。ここでは、①跳び箱運動の苦手な児童生徒にしばしばみられる「腕立て横跳び越し」は、跳び箱運動における粗形態の一つであり、それを積極的に位置づけ直すことが可能であること、②さらにその発展をも展望するという考え方・枠組みが提唱された。本研究は、進藤先生の研究の基盤となり、その後、他の種目における指導理論がその種目特性に応じて展開されていくこととなる。

主として体操、水泳といった個人種目においてなされてきた授業研究は、集団的な球技スポーツまで拡張されている。ここでの重要な課題は、個別的学习を超えた学習の組織化にあった。それは、体育における「グループ学習」の重要性を理論的・実践的に提示していくことに繋がっている。前述したように、進藤先生は「新学力観」にもとづく体育授業研究を批判的に読み解きながら、「みんなができる」内容の構築を検討されてきた。それは、近年の個別化＝差別化と習熟度別学習、競争の学力観と大きく異なるだけでなく、その実施内容を具体的積極的に展開した点で、優れて今日的意義を有しているといえる。

こうした研究の背景に、技能に大きな差がある北大における体育実技授業があったことも重要であろう。進藤先生は、体育の授業において積極的に初心者位置づけ、経験者を含めた運動認識の深化や理解を促進する授業を構想し展開されてきた。ここでは、単に大学とい

った学校の内部にとどまらず、生涯にわたってスポーツを実践できる主体的力量形成が目指されていたことも忘れてはならない。

以上、進藤先生の研究は、北大の体育授業を主要なフィールドとしながら、大学教育に直結した形で展開されてきた。それは同時に、小・中・高校の体育授業の実践的課題とも呼応するものとして把握され、その理論的・実践的指導理論の構築へと結実していった。

また進藤先生の研究は、北大における体育実技教育のあり方、教師教育の方向性を明確に指し示しつつ、北大や教育現場に良質な教育内容を提示し続けるという点で重要な貢献をなしてきたといえる。それは、全学教育（体育学）の具体的あり方について主導的役割を果たし、その研究蓄積を常に現場へと還元し続けてきたという点で、重要な位置を占めるものでもあった。

さて、進藤先生をはじめとする体育方法研究グループからは、多くの学生が巣立っていったことにも触れなければならない。彼・彼女らの多くは、研究職、教職に就くものをはじめ、NPOや民間企業等、研究・教育の幅広い分野で活躍している。また進藤先生は、北海道大学体育会顧問を20年にわたって務められるなど、学生の体育・スポーツ活動の指導的立場に立てられてきた。その意味で、全学的体育・スポーツ環境の整備や学生スポーツのあり方について多大な影響を本学学生に及ぼしてきたといえる。

学生を中心に考えること。常に進藤先生が述べられていたことであり、そこから授業を組み立てていくことは、本学の体育教育にも受け継がれてきている。駆け出しの一体育教師であった私の前には、いつも進藤先生の背中があったことはいまでもない。

永きにわたり本学の教育・研究に惜しみない力を注がれたこと、また体育教育の未来に対して常に光を投げかけられたことに感謝申し上げます。今後とも学生・院生、われわれ教員に対し、その親しみやすい姿勢でもってご指導いただきますよう、そして先生の研究が更なる発展をとげ、今後の体育研究や教育実践の発展に寄与されますことを心より祈念いたします。

主要業績一覧

論文等の名称	単著／共著	発行年	発表雑誌・巻号・発行所
(1) 論文等			
1 中教審答申をめぐって	単	1971	体育グループ 34, とうこう
2 体育実践と学力問題 : 水泳で何を教えるか	単	1977	体育科教育 25(11), 大修館書店
3 とび箱運動の特質と技術指導の課題 : 技を見つめあい、励ましあい、教えあう力	単	1981	現代教育科学 298, 明治図書.
4 なぜ「腕立て横とびこし」から教えるか : とび箱の基礎技術を考える	単	1982	たのしい体育・スポーツ 1, 民衆社
5 体育の授業と「知的認識」	単	1982	体育科教育 30(7), 大修館書店
6 体育の学習内容と水泳指導	単	1982	高校生活指導 62, 明治図書

7	教育・体育政策における体育クラブ	単	1982	生活指導,民衆社
8	体育の授業と学習集団の指導	単	1985	たのしい体育・スポーツ 15, 民衆社
9	私たちが重視している指導法 :バタフライの指導で	単	1986	たのしい体育・スポーツ 18, 民衆社
10	器械運動の技術指導上の課題 :とび箱と跳馬 低鉄棒と高鉄棒はつながるか	単	1986	たのしい体育・スポーツ 19, 民衆社
11	体育では何を教えるのか :二つのレポートから	単	1987	体育科教育 35(3), 大修館書店
12	運動技術の習得と体育授業	単	1987	体育科教育 35(9), 大修館書店
13	グループづくりのポイント	単	1987	体育科教育 36(3), 大修館書店
14	とび箱運動における技術指導体系に 関する研究(1)	単	1988	北海道大学教育学部 紀要 51
15	スポーツ運動系の人間的価値と 技術認識・習熟のための課題	単	1994	運動文化研究 12, 三誠社
16	競技スポーツに学ぶ :マット運動から床運動への発展のために	単	1994	たのしい体育・スポーツ 46, 創文企画
17	運動技術の学習と指導技術	単	1994	体育科教育 42(11), 大修館書店
18	地域の特性を生かした研究授業	単	1995	体育科教育 43(3), 大修館書店
19	器械運動の研究・実践上の成果と課題	単	1995	第110回学校体育研究 同志会全国研究大会 提案集,三誠社
20	運動技術とその内容・教材化(上)	単	1995	たのしい体育・スポーツ64, 創文企画
21	運動技術とその内容・教材化(下)	単	1996	たのしい体育・スポーツ67, 創文企画
22	しなやかなオーバーハンドパスを 求めて①～③	単	1996	たのしい体育・スポーツ 67-69,創文企画
23	みんなが「できる」・「わかる」体育の授業を 求めて①～⑫	単	1996-1997	楽しい体育の授業 68-70 ;72-77;79-81,明治図書
24	「体練科」から「体育科」へ :(1)丹下保夫の体育観	単	1996	楽しい体育の授業 78, 明治図書
25	体育授業における技術学習の位置	単	1997	たのしい体育・スポーツ 88-89,創文企画
26	ルールの何を教えるのか :“わかる”対象の多様性	単	1998	体育科教育 45(12), 大修館書店

27	今こそ体育でむすぶ力を	単	1998	学校体育 51(4), 日本体育社
28	教材の妥当性と構成の視点	単	1998	体育科教育 46(8), 大修館書店
29	生活体育の「実践的実験」から「子どもの運動のよこびを高める技術指導」へ	単	2001	たのしい体育・スポーツ134, 創文企画
30	初心者に対するソフトボールの技術・戦術指導について	共	2001	北海道大学大学院 教育学研究科紀要 83
31	技術指導の系統性研究の発展	単	2002	たのしい体育・スポーツ135, 創文企画
32	「系統性」研究の方法論:水泳研究に学ぶ	単	2002	たのしい体育・スポーツ140, 創文企画
33	「2:0の論理」と技術の「系統性」をめぐる議論	単	2002	たのしい体育・スポーツ147, 創文企画
34	「戦略・戦術論」の登場と技術・戦術指導の課題	単	2002	たのしい体育・スポーツ148, 創文企画
35	バレーボールの初心者に対するパスの技術指導	単	2003	北海道大学大学院 教育学研究科紀要 89
36	運動技術の学習・指導研究の最前線から学ぶ	単	2003	たのしい体育・スポーツ159, 創文企画
37	「できること」の意味と実践研究の課題	単	2004	たのしい体育・スポーツ165, 創文企画
38	バレーボールのパスの教材構成と教授プログラム	単	2007	北海道大学大学院 教育学研究科紀要 101

(2) 実践研究等

2-1. 実践研究

1	とび箱運動の実践	単	1974	運動文化 1, ユニオン
2	体育における学習集団の指導 : マット運動の実践より	単	1975	高校生活指導 32, 明治図書
3	体育の授業と学習集団の指導 : 続・マット運動の実践より	単	1976	高校生活指導 35, 明治図書
4	横とびからハンドスプリングへ(高学年)	単	1988	体育科教育 36(13), 大修館書店

2-2. 研究報告・基調報告

1	技術の系統指導とグループ学習	単	1977	第66回学校体育研究同志 会全国研究大会提案集
---	----------------	---	------	----------------------------

2	体育科教育で養う学力とは	単	1980	第75回学校体育研究同志会全国研究大会提案集
3	体育で養う学力とは何か	単	1981	運動文化 77
4	運動構造の洗いなおしと 教えるべき内容を明らかにしよう	単	1986	第92回学校体育研究同志会全国研究大会提案集
5	美しく雄大な自己表現を すべての子どもたちに	単	1988	第96回学校体育研究同志会全国研究大会提案集
6	技術内容を明らかにして 授業実践の方法論を確立しよう	単	1991	第102回学校体育研究同志会全国研究大会提案集
7	子どもと実践・研究・生活を見なおそう	単	2001	運動文化研究 19,三誠社
8	水泳運動の技術指導上の課題	単	2004	第128回学校体育研究同志会全国研究大会提案集
9	水泳と器械運動の「基礎技術論」再考	単	2004	第129回学校体育研究同志会全国研究大会提案集

2-3.論評・実践批評

1	第三分科会まとめ 体育科教育の本質と運動文化論	単	1968	体育グループ 14(12), とうこう
2	バレーボールの基礎技術と その系統性についての問題提起	単	1972	体育グループ 18(3), とうこう
3	三つの実践をよんで	単	1980	運動文化73,ユニオン
4	運動文化の歴史的使命を終えるにあたって	単	1982	運動文化79,ユニオン
5	技術内容や教材の質を不問	単	1986	教育463,国土社
6	子どもを授業の主人公に	単	1987	現代教育科学37, 明治図書
7	「法則化体育」運動の可能性と課題	単	1993	体育科教育41(2), 大修館書店
8	「めあて学習」の理想と現実	単	1997	体育科教育45(4), 大修館書店
9	日本体育学会(第50回記念大会)報告	単	2000	たのしい体育・スポーツ117, 創文企画
10	認識(わかる)対象をさらに鮮明に!! :対照的な二つの実践	単	2000	たのしい体育・スポーツ123, 創文企画
11	体育学・スポーツ科学の総合化への 遠い道のり	単	2000	運動文化研究18,三誠社

2-4.巻頭言など

1	本ものを教えたいと思うのだが…	単	1973	体育グループ 20 (2):1-2, とうこう
2	粘っこく頑張ろう!	単	1974	体育グループ 21 (2), とうこう
3	花開け、北国の水泳文化	単	1994	たのしい体育・スポーツ48, 創文企画
4	美しい自己表現の世界を すべての子どもたちに	単	1996	たのしい体育・スポーツ73, 創文企画
5	“動きのイメージ” から正しい動きへ	単	1998	楽しい体育の授業100, 明治図書
6	子どもの事実を見つめなおし 実践と研究のもう一つ高い峰を	単	2001	たのしい体育・スポーツ127, 創文企画
7	「分かる」を大切にした球技の授業を	単	2005	楽しい体育の授業182, 明治図書
8	体育の授業を変えろ :動きを観察・比較する力を育てよう	単	2006	楽しい体育の授業204, 明治図書

3.著書・事典など

3-1.著 書

1	とび箱運動の指導	単	1974	学校体育研究同志会編 『器械運動の指導』, ベースボールマガジン社
2	器械運動	単	1978	民間教育研究団体連絡 協議会編『保健・体育』, 民衆社
3	体育クラブの指導と教師の課題	単	1978	田代三良・木下春雄・ 竹内常一編『講座 現代の 高校教育4』,草土文化
4	跳び箱運動教材について	単	1985	鈴木秀一編『良い教材・ 悪い教材』,日本標準
5	自主的・民主的スポーツ運動の登場	単	1989	学校体育同志会編 『国民運動文化の創造』, 大修館書店

3-2.事 典

1	運動技術の系統性	単	1988	青木一他編『現代教育学 事典』,労働旬報社
2	意識焦点と動作焦点; 運動(動作、動き) ;運動学習; 運動文化・運動文化論 ;技術と技能; スキル(スキルテスト)	単	2001	健康教育大事典編集委員 会編『健康教育大辞典: 子どものからだと心』,旬報社

- | | | | | |
|---|-----------|---|------|-------------------------|
| 3 | 技術と技能のちがひ | 単 | 2006 | 小田伸午編『スポーツの
百科事典』,丸善 |
|---|-----------|---|------|-------------------------|

3-3.座談会・てい談など

- | | | | | |
|---|------------------------------------|---|------|-------------------------|
| 1 | てい談 豊かな授業の創造のために | 単 | 1978 | 運動文化14,ユニオン |
| 2 | てい談 器械運動の新しい発展をもとめて | 単 | 1979 | 運動文化17,ユニオン |
| 3 | 座談会 対談から学んだもの
:研究・活動の新しい前進をめざして | 単 | 1979 | 運動文化19,ユニオン |
| 4 | 座談会 生き生きとした活動の展開を | 単 | 1979 | 運動文化20,ユニオン |
| 5 | 座談会 私たちの陸上競技研究の
これまでとこれから | 単 | 2001 | たのしい体育・スポーツ127,
創文企画 |